

デルフィニウムの促成栽培における加温電照処理開始後の初期管理温度が生育・開花に及ぼす影響

中村 薫・村田寿夫・高橋英生 (宮崎県総合農業試験場)

Kaoru NAKAMURA, Toshio MURATA and Hideo TAKAHASHI Effects of Temperature at Beginning of Heating and Long-Day Treatment on Growth and Flowering in the Forcing Culture of Delphinium (*Delphinium elatum*)

デルフィニウムの促成栽培では、抽だいが不揃いで開花期間が長期にわたり、施設の利用効率が悪い。この点は定植後の1か月間低温遭遇処理により改善はされたが、未だ不十分であり、開花を揃える技術が望まれている。

デルフィニウムは高温により抽だいを開始するため、定植1か月後の加温電照処理開始から1か月間だけ夜温を20℃、その後は13℃で管理することにより抽だい及び開花を斉一化できることを明らかにした。

1. 材料及び方法

ジャイアント・パシフィック系の‘ブルーバード’と‘ガラード’の2品種を供試し、1991年8月1日に4cm角セルトレイに播種した。播種後2週間は80%遮光の雨よけハウス内、3週間日以降は10℃の夜冷育苗施設で夜冷育苗を行った。定植は10月16日に行い、1か月間雨よけ栽培状態で管理した。11月17日から加温電照処理を行った。電照は16時間日長とし、最低夜温は処理開始から1か月間については13℃区と20℃区を設けた。1か月経過後の12月17日からは両区とも13℃に設定した。栽培期間中の最低夜温はほぼ設定どおり推移し、最高気温はできるだけ25℃を越えないように管理した。

2. 結果及び考察

抽だいは‘ブルーバード’の場合、13℃区は11月中旬から、20℃区はこれより1旬遅れて11月下旬から抽だいが始まった。抽だいは13℃区が11月中旬から12月下旬にかけてと、2月下旬以降との2つの時期に分かれて分布し、年内の抽だいら率は約80%であった。これに対し20℃区は、約95%の株が11月下旬から12月中旬までのわずか23日間で抽だいた。ただ、20℃区において抽だい開始時期が13℃区より遅れる原因は明らかでなかった。

開花：開花期は抽だい期を反映し、‘ブルーバード’では、13℃区が12月下旬から2月下旬までだらだらと咲

き続け、この期間に開花しなかった株は4月から6月にかけて開花した。これに対し、20℃区は約95%の個体が1月下旬から2月中旬の28日間に開花し、極めて短期間に開花が揃った(第1図)。
‘ガラード’においても抽だい・開花とも‘ブルーバード’と同じ傾向がみられ、開花揃いはさらに良かった。

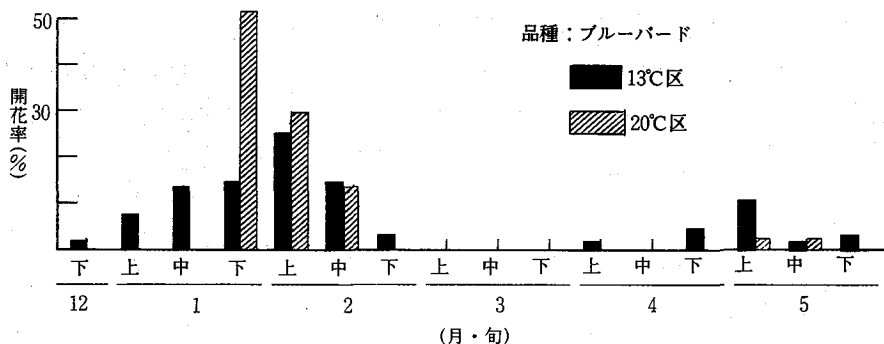
切り花品質：両品種とも20℃区の切り花は13℃区より小花密度がやや低い傾向がみられたが、切り花長、切り花重とも区間差がなく、十分に市場性のあるものであった(第1表)。

以上の結果から、デルフィニウムの促成栽培において加温電照開始から1か月間だけ20℃で管理し、その後は13℃で管理する方法により、開花を斉一化できることを明らかにした。このことは1番花の収穫が短期間で終了できるばかりでなく、2番花の開花期の早進化と斉一化が期待できると考えられた。

第1表 加温電照開始後の初期管理温度が切り花品質に及ぼす影響

品種	試験区	切花長	切花重	花穂長	小花数	小花密度
		(cm)	(g)	(cm)	(個)	(個/cm)
ブルーバード	13℃	147.7	109.3	63.8	50.8	0.80
	20℃	140.7	115.0	70.9	40.7	0.57

注) 3月以降開花株は含まない
a) 花穂1cm当たりの小花数



第1図 加温電照開始後の初期管理温度が旬別開花率に及ぼす影響